

# 佐伯を素材とした 独歩の作品

(下)

山内武麿

(賛助会員・佐伯市城下東町)

## (八) 春の鳥

この小説は明治三十七年の三月十五日発行の雑誌『女学世界』に発表され、後に『独歩集』に収められた。

「今より六七年前、私は或地方に英語と数学の教師を為て居たことが御座います。其町に城山といふのがあって大木暗く繁った山で、餘り高くないが甚だ風景に富で居ましたゆゑ私は散歩がてら何時も此の山に登りました」

と書き出してある。私とは無論独歩自身のこと、或地方とは佐伯である。

次に頂上の城趾の様子を写し、幾度も登って楽しんでと記してある。ある日曜の午後、山上で本を読んでいる

と、人の話声がするので下を見ると三人の小娘が枯枝を拾いに來ていた。すると突然この小娘がキヤツと叫んで枯木を背負って逃げ出した。どうしたのかと見ると、森の中から十一か十二歳かと思われる男の子が出て来て自分の処に近づいてニヤリと笑った。

そして二人の会話が始まり、年を聞いたり名前を聞く。この小説の主人公六蔵と初めて会うところである。

次にこれまで宿屋住いをしていたが、田口という家の二階二間を借りて、下宿した。この田口家は昔の家老職で城山下の立派な屋敷は昔のまゝの有福な家で、この家の主人の一方ならぬ好意によって下宿させてもらったのであった。この田口は坂本家で、主人は当時鶴谷学館の監事で館長を兼ねていた永年氏である。

そしてこの田口に移った翌朝、この六さんに会う。六

蔵はこの家で養われている生れつきの白痴である。早く夫に死別したこの家の主人の妹にあたる母親がこの六蔵と、その姉のおしげとの二人を連れて実家に寄食していたのである。

これからこの主人の依頼によって、この六蔵の教育を引受けて色々と手を尽くしてやってみるが少しも効果がない。

しかし、この白痴の少年は作者独歩にはまるで天使に見えた。



天守台の石垣

「空の色、日の光、古い城趾、そして少年、まるで画です。少年は天使です。此時私の眼には六蔵が白痴とは如何しても見えませんでした。白痴と天使、何といふ哀れな対称でしょう。しかし私は此時、白痴ながらも少年はやはり自然の児であるかと、つくづく感じました」

と記されてある。

この六蔵には一つの妙な癖があった。それは鳥さえ見れば眼の色を変えるほど鳥好きであった。しかもどの鳥を見ても鳥と呼び、鳥の名を教えても覚えなない。鳥が木の枝で鳴くを見ると六蔵は口をあんぐりあけて眺め入り空飛ぶ鳥を見ればたゞぼんやりといつまでも見送っていた。

こゝまでは殆んど事実であるが、この次の出来ごとは創作である。

その翌年の春に六蔵の身の上に不慮の災難が起った。三月の末の或朝六蔵が急に姿が見えなくなった。昼過ぎても帰って来ない。とうとう日暮になっても帰って来ないので、みんな心配し、母親は居ても起ってもいられない様子である。それで私（作者）は先ず城山を探すのが

よかろうと、下男一人を連れて提灯をたよりに城山へ登り、頂上の城跡まで登った。そして天主台の上から石垣の下をのぞいて見ると、六蔵の死骸を発見した。これはさっと六蔵が鳥のまねをして石垣の上から身を躍らしたものと想像した。そして作者の心の中に、人類と他の動物との相違、人類と自然との関係、生命と死、などの問題で深い哀しみを起こした。

そして自分が日頃から愛誦しているワーズワースの詩を追想して、

「英国の有名な詩人の詩に『童なりけり』といふのがあります。それは一人の児童は夕毎に淋しい湖水の畔に立て、両手の指を組み合はして、梟の啼くまねをすると、湖水の向の山の梟がこれに返事する。これを其童は楽しみにして居ましたが遂に死にまして、静かな墓に葬られ、其霊は自然の懐に返ったといふ意を詠じたものであります。

私はこの詩が嗜きで常に読んで居ましたが、六蔵の死を見て、其生涯を思ふて、其白痴を思ふ時は、この詩よりも六蔵のことは更に意味あるやうに私は感じました。

と記してある。

石垣の上に立って自在に飛び廻る春の鳥を見て、あの一羽は六蔵ではあるまいか、六蔵でないとしても、六蔵はあの鳥とどれだけ異っていたらうと述懐している。

次に六蔵の墓の前で、六蔵の死を悲しんでいる母親をなぐさめた。城山の森から一羽の鳥がゆるやかに飛んできて、二声三声鳴きながら浜の方に消えて行くのを母親は我を忘れて見送る姿を描写し、「この一羽の鳥を六蔵の母が何と見たでしょう」と結んである。

以上がこの小説の概略である。

独歩が明治四十一年二月、神奈川県茅ヶ崎の南湖院に入院し、それを訪ねた真山青果が独歩の口述を筆記した「病牀録」の第四芸術観の中に「春の鳥の少年」と題して次のような文がある。

「春の鳥」は余が佐伯当時、事実、ある少年を描けるものなり。現に今も生きて居れりと聞く。(註)昭和二十三年まで生きていたという。

その少年と云ふは、金箔附の白痴にて、奈何に啓発し、誘導し、教育するも、殆ど教の觀念なし。当時の余は甚しき空想家なりしを以て、慥に教育し得るものと信じて疑ふ所なかりき。脳組織中の或一部に障害ありて全機関の作用に障害を

及ぼすものなるを以て、其れを除き去らば、自然の靈知は閃光の如く湧立つに相違なかる可しと信じて、亦疑ふ所なかりき。故にあらゆる方法を試みて教へつ賺しつ、時には叱りつけてまで、泣くが如き思にて教育せり。然れども遂に教育の効果も見ること能はざりし時は、余と雖も自然を疑はざるを得ざりき。」

この少年の実名は山中泰雄といった。前に記したように、未亡人になった母親に、その姉と二人が連れられて母親の実家坂本家で養われていたのである。主人の坂本氏からこの少年の教育を頼まれた独歩は、深い同情心からやってみようと引受けて力を尽して教育してみたが駄目であった。このことを詳しく記述してあるのが独歩の遺稿の中にある「憐れなる児」（定本国木田独歩全集巻九に所載）と補遺の中にある「可憐児」（同じく全集巻十に所載）である。この二作は殆んど同じである。

『欺かざるの記』の明治二十六年十一月二十七日の記の中に、昨夜（二十六日）二階から下りて坂本老人と語った。その話は岡の谷の避病院に務めている老翁のことと乞食紀州の話をし、「彼の老翁、此乞食、共に悲しき物語ならずや。吾が「潔」（独歩の仮托自称と思われる）

は甚だこれを感じぬ。」と記してある。この晩の話はこの老翁と乞食の話だけではなく、この六歳の話があったのであろう。「憐れなる児」及び「可憐児」の冒頭に、

「一昨日は日曜日なりき。其夜吾二階を下りて坂本老人と物語りす。座に嬢と収二とあり、互に四方山の噂に笑声相続く、最も楽しき晩なりしなり。」

とある。しかも「可憐児」の一番初めに「明治廿六年十一月二十八日始ム」と記してある。「欺かざるの記」と日附けがびつたり合う。

物語は乞食紀州の話をして後、主人（坂本翁）から「さて先生吾家にも亦た一個の愚者あり、己に御存じの如し。其愚かなる事譬へがたなき程なり。如何にすれば宜しきか。殆んど当惑致し居る也。先生別に御工夫もなきものに候や」と相談を持ちかけられた。そしてこの可憐児の素性を知り同情に堪えず、何とかやってみましようと思承諾する。そして数の觀念が全く無いので高等小学校へ連れて行って門前の石段を数えることから始めたが、どうしても数えることが出来ない。その外は勿論駄目であっ

た。「可憐児は依然として可憐児なり。然り彼は其不運なる天稟と其不幸なる境遇との為に益々可憐の者となりつゝあるなり。」と深く同情してある。

この二作は「春の鳥」の前作とも言うべき作品で、この作品を創作化して「春の鳥」が生れたものと思われる。独歩の評論の中にある「予が作品と事実」の「春の鳥」の項に、

「此の一編の主人公、白痴の少年は余が豊後佐伯町に在りし時親しく接近した実在人物で、此少年の身の上話は皆な事実である。しかして此少年が城山で悲惨な最後を遂げた事は余の想である。余は此少年を非常に気の毒に思ひ、自ら進んで其教育に従事して見た事もある。数の観念が全く欠けて居るので如何にもして此欠陥の幾分なりとも補ひくれんと種々の手段を採った事もある。けれども此等は悉く徒労に帰した。そこで余は当時白痴者に就き深い同情と興味を持ち常にこれを念頭に置いて居た。

此少年の事を思つて、人間と鳥獣の差別、生物と宇宙の關係など、随分城山の上で空想に耽つたものである。そして此一編が七八年の後に出来たのである。」

と記されてある。

この小説「春の鳥」は、独歩のあふれるような愛情と善意がこもっている作品である。

### (九) 入郷記

この作は明治三十九年十月一日発行の『中央公論』に発表され、後に『独歩集第二』に収められた。

九月三十日、十月一日、十月二日の三日間の日記体で書いてある。主人公の「潔」という青年が亡母の遺骨を持って故郷に帰る旅日記である。この青年の一家はずつと前、故郷を離れて東京暮しをしていて、祖母だけ五年前に故郷に帰って旧宅に住んでいた。その祖母のもとに帰るのである。この故郷の町はどことも書いてないが、佐伯に間違いないと思われる。

九月三十日の午後一時大阪港から汽船に乗込んで、夜になって甲板に出て大空の星を仰ぐと出る。そして故郷のことを思う。

十月一日の記では甲板で一人の婦人と会う。

「お身は何処まで」

これ彼女が問ひかけし言葉なり。

「某町まで」と我は答へぬ。

彼女は驚ける様にて、自己も亦「某町」に往く者なる者なるを告げ且つ「某町」は則ち自己の故郷にして今は帰路なる由を語りぬ。」

とあって、この二人の会話が始まる。

そして、何の用事で其町に行くのかと問うたので、帰省するのであると答えると、不審そうに凝視める。しばらくして、

「お宅は何処ぞ」と訪ねぬ。

「二十年目に帰るなり、さらばよくは様子も知らねで、家は城山の麓、山際という処にありとか、君は上村といふ家を知らずや。」

彼女はこの答を聞て、愕然と驚きたるまゝ愈々訝かしげに我を眺めつ、忍びやかに、

「然らば君は潔様にては在さずや」

との間に我も流石に驚きぬ。」

とある。この女は村田きみと云って、年若い頃この潔の家によく出入していたので、潔が生れて二年目に一家が

挙げて上京したことなどよく知っていた。そして今でも祖母とよく会い潔のことも聞いていたと話す。そして甲板上で色々と話しあっている。

明日はいよいよ故郷だと色々と想像する。

十月二日の正午、汽船は某港に着いた。

「実に寂寥たる港なり。港よりは市街見えず、二三箇の間屋らしき家屋山の麓に在り。其の外に家無し。二三の漁舟波止場の蔭に眠るが如く泛ぶを見たり。」

と昔の葛港の風景を叙してある。

それから村田老女が人力車二輛を世話して、車夫に言いつくめてわが家に送ってくれた。

「車山を繞れば眼前に現はれ来りしものは、歴史癖の詩人、詩人的歴史家の夢想に依って描かれしが如き古城趾なり。堤の上、一列に立ち並びたる老松の色黒く風轟々と鳴れる様、直ちに人をして古封建の名残を感じしめたり。

一山の鬱々と茂りたるあり、一見して其城山なるを知りぬ、車は馳せて其麓に近きこの家の前に止まりし時、門前に一人の老嫗を見たり。即ち吾が祖母様の待ち焦がれ居たまひしなり。」

と、結んである。山際や城山の情景を写し出してある。  
・この作は独歩の遺稿として残っている「潔の半生」と  
関連している。

### (一〇) 不可思議なる大自然

これには(ワーツワースの自然主義と余)という副題  
をつけてある。

この評論は明治四十一年二月一日に発行された『早稲  
田文学』第二十七号に載った。署名は国木田独歩となっ  
ている。

「余の如き実に言ふに足らず、余の如きが自然主義者であ  
らうが、あるまいが、問題にもならないことで、それを自か  
ら彼是れと言ひ出すのは馬鹿がましき至りなるが、本誌の新  
年号に於て島村抱月氏の「文芸上の自然主義」てふ有益なる  
論文中、「主義と名のつかぬ自然主義は早くイギリスのワー  
ツワースに端を發し」とありて、余をしてさてはと思はしむ  
所あり、従て本誌上に於て二言三言述べて見たくなった次第  
である。」

と書き出してある。

独歩は文壇から自然主義者だと見られているが、独歩  
自身は、従來の作品は自然主義であるかどうかかわからず  
に、たゞ自分の見たところ信じてるところから書いたと言  
っている。

そして独歩は自分の文学の本源は何かと自問してワー  
ツワースに到達している。島村抱月から指摘され、さて  
は自分も遂にライダルの谷間から流れ出た自然主義の流  
を掬んだのかとうなずいている。

「余が初て短篇小説を書いたのは今より十年以前である。  
それより更に五六年前余は覚束なき英語教師として豊後国佐  
伯町に一年間滞在して居たが、当時余は最も熱心なるワー  
ツワース信者で、而てワーツワース信者に取っては佐伯町は実  
に満目悉くワーツワースの詩編其物の感があったのである。  
山に富み溪流に富み、溪谷の奥に小村落あり、村落老て物語  
多く、実にワーツワース信者をして「マイケル」の二三は此  
処彼処に転がって居そうに思はしめた位である。斯る場所に  
在て日夕ワーツワースの詩編に夢中になつて居た余が如何程  
までワーツワースの感化を受けたかは當時の余の「日記」が  
証明して居る。」

と記して、明治二十六年十二月二十日から末日までの日記（欺かざるの記）から四箇所を抜き書してある。

そして其後一年余り過ぎて、独歩が何か書こうと選び出した題材として、

◎芳島と女島との間の渡守り。

◎女島にて見たる水門を下せし若者。

◎船頭町より木立村の間を渡す舟子。

◎十二段（山名）の山腹にて逢ひし老樵夫。

◎こじき紀州（人名）

を列記して、「而て「日記」の一節に曰く『余は此の一



明治26年頃大分県佐伯にて鶴谷学館生徒と左から2人目独歩

個の人間を思ふ時は同情に堪えぬなり」と。以て如何に深く余がライダルの詩人に動かされて居たかゞ解るだらうと思ふ。」と記してある。

このように独歩はワーズワース信者であったから、自然から離れて世間の人間を思うことは出来なかった。そこで佐伯から去って五六年後に処女作「源叔父」を作り、その主人公の一人は乞食紀州であった。

独歩は後年、ツルゲネーフを読み、トルストイを読み、モーパッサンも読んで、その感化を受けたが、遂にはワーズワースの流を掬んでそれを信じ、それに依って立つた一人であると強く自覚している。

しかし、今わが国の文壇で示されている自然主義とワーズワースの自然主義とは余程相違がある。ワーズワースは人と自然とを離して見なかった。この不可思議な大自然と人生とを別々に考えなかった。今のわが国の自然主義には人があり人生があるが、この人間にとって最も大きな事実である自然の中に観ることがないようだ。と指摘している。

そして最後に、



「悠久にして不可思議なる生死を吐吞する、此大宇宙、爾が如何にもがきて飛び出さんとするも能はざる大自然、事実中の大事実当面の真現象に就ては何等の感想をも懐かない文人が如何に巧に人間の事実を直写したからとてそれは一芸当たるに過ぎない。斯くて文芸何の値ぞ、所謂る自然主義何の値ぞ。」

と結んである。

独歩の文学の素地は、ワーズワースの詩によって培われたと言つてよいだろう。そのワーズワースを最も愛誦したのは佐伯に滞在していた時である。佐伯の自然、風物が、ワーズワースの詩とそっくりに或はそれ以上に見えたと独歩は言っている。独歩文学を大きく育てたのは、佐伯の自然、風物であると言つても間違いないであろう。

## (一) 潔の半生

この作は独歩の遺稿として残っているものである。これは独歩自身をモデルとして書いたものと思われる。この「潔」とは独歩自身の仮称らしい。明治二十六年十一月二十日の日記（欺かざるの記）の終りに「彼の老翁、此乞食、共に悲しき物語ならずや、吾が「潔」は甚だこ

れを感じぬ。」とあるし、二十七年一月十八日の記には「『潔白記』に全力の幾分を分たしめよ、否な全力を注がしめよ」とあり、また一月二十四日には「『潔白記』已に三枚を認む」の記がある。この『潔白記』はないが、補遺の中に「（無題）潔の半生」というこの遺稿「潔の半生」の下書と見られる簡条書きに書いた文章がある。「潔の半生」の梗概を記そう。

「潔は当時二十三歳の壮年男子なり。父は官吏となりて東京に留り潔は四歳の時、母と俱に佐伯を出で父の膝下に往き、遂に今日まで全く都に育てられしなり。」

と書き出して、この潔が十八歳の時、父を失い、翌年は母も逝つて孤児となった。たゞ一人祖母があつて佐伯に居る。東京に住むのを嫌つて、城山の麓にある旧宅を守り、一人の女を使って余生を楽しんでいた。

潔は三年間中学校に学び、一年半大学に通つただけの学歴であつた。祖母はその余命を送るだけの資産があつた。また潔にも父母が相当な財産を残して呉れたので食うには困らなかつた。

そして潔は三、四年滞在する積りで佐伯に帰つた。こ

れまで佐伯のことは想像するだけであった。四歳まで住んでいたが全く忘れてしまっていた。死んだ母から城山や番匠川のことなど聞いてなつかしく佐伯に帰ってみたいと思っていた。

潔は少年の頃から画をかくことが好きで、この趣味で自然に親しんでいた。また読書が好きでカーライル、ワーズワース、エメルソン、聖書など好んで読んだ。彼はまたまだ住んだこともなく、まだ見たこともない村や、まだ通ったことのない宿駅、まだ住み慣れない市街などに一種の興味をもっていた。彼が若し山の谷の底にふと二三十の家のある村を見出したら思わず涙を浮べて感激した。一つの宿駅に近ざいた時、五月であれば鯉のぼりを屋根の上に見た時、子どもの群に会った時など他の世界から人間の世界に降りて来たように、胸がとどろき嬉しく珍しそうに見廻っていた。その時こそ最もよく人情を観、自然を観、人生を観たようであった。

佐伯は潔の本当の故郷である。父母の故郷である。その上に前述べたような趣味がある。

潔は佐伯の自然をこよなく愛した。しかしそれは佐伯であるからではない。たゞ自然の美は佐伯が最も強く彼

れを動かした。城山、元越山、灘山、尺間山、彦岳凡てその美しさを彼に与えた。

そして次に臼坪道を通って蟹田までの散歩がよく散歩した道の風景、風物を叙してある。

潔が佐伯に居たのは三年だった。失恋の打撃を受けて佐伯を去って行く。しかし佐伯のことは少しも忘れられなかった。一人の孤児のこと、乞食のこと、渡守のこと、面白い翁のことを思い、深く同情してある。

次に「春の鳥」に出る六さんのことを次のように創作して記してある。

「潔の隣家に一家族住めり、一人の母と三人の小児と甚だ貧しく送りけり。長女は十七歳、次女は十五歳、末は十二歳の男子なりき。母の人はあたかも五十の坂を越えたり。寡婦と孤児等は八年前其夫たり父たる人を失ひぬ。今は養賢寺なる墓石已にや、黒く染りけれども、たよりなき此遺族は日に貧より貧に陥るのみにて母は精神的に半ば死にたるばかりなり。長女と次女とは人並なりしも、如何なる不運ぞ、末の小児は全く愚鈍なりき。潔此家族と相知り、愚鈍の少年は潔に教へられ、導かれ、甚だ進歩したり、而し十三歳の春、忽然として逝きぬ。母は喪心して亦其跡を追ひぬ。今は此家族只

だ二人の女を餘すのみ。」

潔は毎日日記を作った。出来るだけ詳細に書いた。あのりのまゝの観察であり、感情であり、思想である。さんげもあり、虚栄もあり、空想もあり、誇りもあり、恥辱もある。彼はたゞ其の日其の日と書き続けた。欺かざるの記のことを言ったのである。

そして「或日の記」と題して三日間の日記が記してある。みな佐伯のことである。

潔はまた佐伯の歴史に熱中して近傍を歩き廻った。とくに城山の旧跡は彼に強い印象を与え、色々と想像して感動し、歴史を回想した。城山の秋の紅葉、冬は樹梢を鳴らす音のすごさ、朝日夕日の美しさ、木に巻きつく葛、石垣の苔などみな封建時代の武士の夢のあとであった。また頂上からの眺望は素敵である。と城山のことを叙景してある。

潔に愛する少年が出来た。彼はこの少年を弟の如く愛した。そしてこの少年は志を立て都に出て勉学する目的で佐伯を出発した。その出発を見送って別れる時の悲しさを書いてある。

そして老祖母と別れ佐伯を去って行く。

以上がこの「潔の半生」のあらましである。佐伯を書いた小説といつてよいであろう。しかも美しい文章で書いてある。再読、三読する価値のある作である。

### (二) (無題) 潔の半生

補遺として残っている作品である。(『定本国木田独歩全集第十巻』に所載)。この作品は前述べた「潔の半生」の草稿書きとも思われるもので、感じたこと、見たものなどを箇条書きにしてある。

### (三) 信仰生命

この作は独歩の遺稿で、(二)苦悶の叫で述べたように、佐伯在任中に書いた「今井氏に与ふる書」を改作したものである。そして「苦悶の叫」の前作というべき作品である。

「友よ左に記する者は吾が「欺かざるの記」の中に誌されし処なり、事実の一篇は嘗て君に報じたりと記憶す、兎も角も余が自ら宇宙との関係極めて曖昧なることを知るに至る試験は是なり。「欺かざるの記」は直感の筆なり。故に前後重

復、乱雑、不明、又他人に示すに堪へざるもの、されど茲に一字もかへざるを欲す。吾が苦悶、熱情はたしかに又此の乱文のうちに在れば也」

と書き出して、「苦悶の叫」に記してある明治二十七年五月十八日と十九日の夜、岡の谷（独歩のいう寂寞の谷）の散歩記を書き、つゞいて宗教界、文学界、政治界などに言及し、自分の信仰生活を反省したりして、内容は「苦悶の叫」と同じである。

(一四) 憐れなる男

(一五) 可憐児

この二作は殆んど同じ文章である。「可憐児に最初に「明治廿六年十一月二十八日始ム」とあるから、独歩が佐伯で書いたのである。「憐れなる児」はこの「可憐児」を清書しつゝ僅か直したものであらう。

「憐れなる児」は『定本国木田独歩全集第九卷』に遺稿として載っており、「可憐児」は巻十に補遺として残っている。

(一六) (無題創作メモ)

これは『定本国木田独歩全集第十卷』の中に「断片」として載っている。

佐伯に居るときの『欺かざるの記』の中から、また憶い出をメモとして書いたものである。次に全部挙げてみよう。

○芳嶋と女嶋との間の渡守り。

○女嶋にて見たる、水門を下ろし居たる若者。

○船頭町より木立村の間を渡す舟子。

○「十二段」よりの帰路、木立より乗りたる舟の船頭。

○彼の舟其物、乗り込む、田舎の人々。

○此舟に乗り込む場処、即ち船頭町の岸。

○街頭若しくは町端の小供等。

○牛つば村。の刈入れ。

○蟹田の数家、かじや。

○十二段の山腹にて逢ふたる老樵夫。

○十二段

○岩谷村

○「教会」

○清正公様の太鼓の音。

○理髮所に聞きつる談話。

○「田なか」にある、ほこら、これぞ亦た余がチャームな

○城山の廃跡。

○城山にて出遇ひし老女、小女等の木ひろひ。

○藤形夫婦に就き収二より聞きつる談話。

○山県の妻、母、下女

○高等小学校の傍に在る井戸の水くみ。

○牛つば村の墓地並に入屋、小兒等

○十二段の半腹より立ちのぼる煙

○天長節に乞食の児

○麦撤きの野辺のにぎやひ。城山の後の広き野。

○山の峰より西方群山を眺めて夕陽の美に打たる。

○尺間山。

○尺間山の宿。に於ける女。

○巖頭の月

○一ノ鳥井の一軒家 住む人何者ぞ

○悲壮なる恋！

○旗本の翁

○蟹田

○櫃の堤

○砂糖製造

○正一位五所大明神

○土河内村

○紀州乞食

○余が想像中なる古代日本、そは古人の詩歌などにて描かれし者なり。

余は此の想像中の吾国を想ふ時は、自然に此の国を慕はしく思ふなり。

史上に出遇ふたる人が活動して山林、原野、都会に現はれるなり。(二十八年四月八日)

この外にまだ少しあちこちの文章の中に見えるものもあるが、大体挙げたつもりである。



(完)